

アシュアリー神学の位置づけ

塩尻和子

(筑波大学助教授)

(和文要旨)

イスラームの多数派神学思想、スンナ派の祖となったアシュアリーは、理性主義的なムウタズィラ学派に対抗して、クルアーンとスンナに忠実な神学思想を体系づけた。彼の思想のなかで最も特徴的なものは、人間の行為と責任の関係を「獲得」(カスブ)という用語で解説したことである。クルアーンにみられる「神の予定と人間の責任」という相反する立場は、とくに倫理的な価値判断の基準をどこに求めるかという点について激しい論争を引き起こしたが、アシュアリーのカスブ説は、伝統的主義的な神学思想の枠内でこの問題に解決を図ろうとしたものである。そこでは、神のみがあらゆる行為を創造し、人間は与えられた意志と能力にしたがって神が創造した行為を獲得する。これによって神の全能性は全うされると同時に人間の責任も問うことができると考えられた。この説は後世のスンナ派によって定着していくことになるが、現代でもその評価はわかれている。

(SUMMARY)

In Islam, al-Ash'arī is regarded as the founder of the Sunnite theology, who fought against the Islamic rationalism of Mut'azilah all his life after he had converted to the traditional doctrine. One of the most eminent theories he formed in order to related the human's act to his responsibility is the theory of "kasb", acquisition. The Qur'anic teaching of the controversial doctrine on God's predestination and man's responsibility had provoked long fierce disputes over which to be the criterion of the ethical value. In this acquisition, God creates every act and bestows it on man who is at the same time given by God the will and the ability to execute his action. Through this process, man is said to "acquire" this created act so that he could be responsible for his act. Here not only could God's omnipotence be protected, but also man's morality should be questioned. Ash'arī's acquisition has been accepted as quasi orthodox dogma, which it is still a matter of argument.

1. はじめに

イスラーム神学思想には、啓示を最優先し聖典クルアーンとスンナ(預言者の言行)に判断基準をおく伝統主義的神学と、人間の理性に判断基準をおく合理主義的神学とに分かれる二つの潮流があり、思想史上、つねに対抗しあってきた⁽¹⁾。それは、全知全能の絶対神による「定命」の思想と、現世における人間の行為の善悪に応じて報償が確定する場としての「来世」の思想という、いずれもイスラームの基本的信条に起因する立場である。言いかえるとイスラームには超越的な神による宿命論と、被造物である人間の側の責任論という相反する立場が併存している。このどちらを強調するかによって、思想的潮流が決定されるが、この議論はイスラーム倫理思想において、とりわけ大きな争点となる⁽²⁾。

しかし、同時に戒律の宗教という性格をもつイスラームでは、どの神学派のもとであろうとも、信徒の生活のあらゆる面を覆う厳格な「イスラーム法」が神の法として施行されている。イスラーム法は宗教的儀礼、日常生活、政治、経済、国際関係にいたるまで、人間のあらゆる生活を対象とする律法であるが、これは基本的に「来世」思想に基づいている。イスラーム法の前では、人間はあくまでも自由意志をもった存在として、厳しい選択を迫られていると言っても言い過ぎではない。イスラームの宗教倫理は、このような日常的な律法の存在を視野にいれて語らなければならない。

イスラーム思想史上最初の神学派として登場したムウタズィラ学派⁽³⁾は人間の自由意志に基づいた「行為と責任」を標榜して、ある意味でイスラーム法との調和を図ったが、多数派には受け容れられず、早い段階で周辺地域へと退いた。いっぽう、イスラームにおいて多数派の支持を得て、正統的神学派⁽⁴⁾となったスンナ派では、超越的な神のもとの宿命論的な傾向が歓迎され、人間の自由意志とそれに伴う倫理意識が過小評価される傾向がみられる。

私はイスラーム倫理思想研究の立場から、ある意味で倫理的楽観論とみることのできる思想がなぜ多数派の支持を得たのかという疑問を、現代に続くスンナ派神学思想の祖とされるアシュアリー思想から検討することにしたい。そのために、アシュアリー自身の著作、後年のアシュアリー学派の著作、なかでもシャフラスターニー(d.1153)の『諸宗教諸分派集』などを手がかりにして、アシュアリー思想を分析しようと試みているが、本稿ではその手始めとして、彼の独自性をよく表している「カスブ論」を中心に人間の行為と責任の関係を考察する。

2 . アシュアリーーの生涯と著作

アシュアリーー (Abū al-Hasan ‘Alī bn Ismā‘īl al-Ash‘arī, 873/4 - 935/6) はイスラーム神学思想のなかで多数派を束ねるスンナ派神学の祖となった人物である。しかし、最初の正統的神学の創始者といわれるわりには、アシュアリーー自身の著作は残されていないばかりでなく、アシュアリーーおよびアシュアリーー学派に関する資料も乏しく、また近年の研究書も少ない。少ないとはいえ、ダニエル・ジマレによる献身的なまでの膨大な緻密な研究書が 2 冊⁽⁵⁾ 出版されており、アシュアリーー研究はこれらに負うところが大きい。

アシュアリーーの生涯は、イスラーム思想史における重要度にもかかわらず、詳しいことは不明である。ガザーリーのような自伝も残していない。いくつかの伝承を総合すれば、バスラで由緒ある家系に生まれたアシュアリーーは、若くしてムウタズィラ学派に所属してジュッバーイー(d.915)⁽⁶⁾ に師事し、この学派の学者として名声を得ていたと伝えられる。やがて師のジュッバーイーとの論争に満足できなくなり、ムウタズィラ学派の思想に疑問を抱くようになる。40歳の頃、その年の断食月に夢のなかに3度、預言者ムハンマドが現れ、クルアーンとスンナに基づく伝統的な信仰に戻るように命じたという。アシュアリーーは15日間、家に籠ったのち、モスクの説教壇にのぼって、伝統的信条に戻ることを宣言したともいわれる。

これらの伝承から、アシュアリーーが短期間ではあったが、自らの学問的信念と伝統的信条とのほざまで、激しい精神的苦痛と緊張に見舞われたことが理解されるが、これは彼とムウタズィラ学派とのあいだに、長期間にわたって見解の相違や不満があり、その結果として生じたものであったと考えられる。その後、彼はムウタズィラ学派において修得した理論的証明法を用いて、素朴な伝統的信条の体系化に取り組み、生涯、合理的な理論と戦い続けたと伝えられる。彼はイスラーム法学の分野ではシャーフイー派⁽⁷⁾ に従い、保守的なハンバル派⁽⁸⁾ とは相容れなかったようであるが、彼の著作『宗教原理の解説』(*al-Ibānah*) のなかでは、自らをハンバル派の創始者イブン・ハンバル(d.855)の信奉者であると認めている。晩年はバグダードに住み、死後、イブン・ハンバルの墓の近くに葬られた。

アシュアリーーは生涯に 99 冊あるいは 55 冊の著書を成したといわれるが、アシュアリーー一名義の著書として現存するものは 7 冊にすぎず、彼の著作として確実視されているものは、わずか 2 冊である。ここでは主要なもの 3 冊だけを簡単に説明する。前述の『宗教原理の解説』(*al-Ibānah ‘an uṣūl al-diyānah*)⁽⁹⁾ は素朴な伝統主義に貫かれている著作であり、

製作年月日は不明であるが、彼の伝統回帰の直後に書かれたものとみることができる。アシュアリー著の著書というにはあまりにも伝統主義的であり、これを偽書とみるむきもある。

『神学要綱 誤謬と異端の徒への返答』(*Kitāb al-luma' fī al-radd 'alā ahl al-zaigh wa-l-bida'*)⁽¹⁰⁾ はアシュアリーの基本的な立場を解説したものであり、彼の神学思想が簡潔に述べられている。しかし、学説の咀嚼が不十分な時期に書かれたのか、写本のせいなのか、語彙の定義があいまいな部分が多い。『イスラーム教徒の言説集』(*Maqālāt al-Islāmīyīn*)⁽¹¹⁾ は晩年にバグダードで書かれたとされるが、彼の時代までのイスラーム各派の主張や見解を予断を加えることなく、客観的に丁寧に採集したものである。学派別とテーマ別とにわけて編集してあるために、各学派の見解が一纏まりになっていない面もあるが、当時の思想界の状況を知るためには、第一級の貴重な資料である。

3 . アシュアリー神学の特徴

彼の思想はのちにガザーリーに引き継がれて、正統的神学としての地位を確保したが、それまでにはかなりの紆余曲折があった。アシュアリーを祖とするアシュアリー学派の思想が、多数派のスナ派神学が成立する基盤となったことは明らかであるが、アシュアリー学派は簡単に世間の承認を得たわけではないようである。生前の彼は、古巢のムウタズィラ学派からも、厳格な伝統主義を標榜するハンバル派の法学者たちからも非難されている。またムウタズィラ学派とは見解を異にするが合理的議論を採用するマートゥリーディー学派⁽¹²⁾からは、あまりにも伝統墨守的であると反駁された。さらに11世紀の半ばには、シーア派のブワイフ朝がムウタズィラ学派を擁護したために、迫害を受けたこともあった。そのためアシュアリーの死後、11世紀の後半になるまで、およそ150年ものあいだ、この学派が歴史の表舞台に登場することはなかったと思われる。しかし、バグダードに都をおいたセルジューク朝が、カイロに建設されたシーア派のファーティマ朝に対抗して、アシュアリー学派を採用したことから立場が逆転する。セルジューク朝の宰相ニザームル・ムルク(1018 - 92)によって各地にニザーミーヤ院が建設され、バグダードの学院でガザーリー(1058 - 1111)がアシュアリー学派の神学とシャーフィイー派の法学を教授したことによって、正統的神学と承認されるための劇的な展開をみたと考えられる。

アシュアリー学派は、イスラームにおける頑迷な伝統主義を排除するとともに、ムウタズィラ学派の理性主義的な合理主義によって抽象的な議論に耽ることを避け、その中間をおこなったといわれている。これはアシュアリーが神の属性に関して、二つの「中道」を

採ったとされることから理解される。第一として、彼は、素朴な神人同型説的な信条を排除するとともに、ムウタズィラ学派による抽象的な比喩的解釈をも排除した。第二として、それと同時にムウタズィラ学派の比喩的解釈の方法論を用いて、神人同型説に陥らないように工夫を凝らした。これは同じことの両面を言い換えたものであるが、以下のよう
にまとめられよう。

- (1) 神は知識、能力、視覚、聴覚、言語、などのような永遠なる属性をもっており、それによって知り、行い、見、聞き、話すことができるものである。ムウタズィラ学派が言うように、それらの属性は神の本質として「それ自体で」、あるいは、「それ自体にある在り方によって」実現される、ということではない⁽¹³⁾。
- (2) クルアーンに記されている「神の手」「神の顔」「神の玉座」⁽¹⁴⁾などの表現は、ムウタズィラ学派が言うように「神の恩恵」とか「神の慈愛」「神の権威」などと比喩的に解釈することはできない。しかし、伝統主義者の主張するように、具体的な身体や物質として表現されているとも考えてはならない。それらも神の属性であるが、その在り方は被造物には知らされていない。
- (3) 永遠なる存在としては神以外にはないという「神の唯一性」を主張するためにムウタズィラ学派が主張する「創造されたクルアーン」説⁽¹⁵⁾に反対して、クルアーンは神の永遠なる言葉であり、創造されたものではなく、神と共に永遠に存在すると主張する。しかし、頑迷な伝統主義者が主張するように、具体的なかたちをもった「碑文」として天上に存在する、あるいは、現存する書物としてのクルアーンの用紙や文字まで永遠なる存在であるとは考えない。
- (4) 人間の目で実際に見えるものは、物体でしかないとして、神の姿は人間には見るできないとするムウタズィラ学派の主張に対して見神論⁽¹⁶⁾を主張し、来世では信徒は大いなる恩恵として実際に神の姿を見ることができるが、それがどのような様式や方法によるものかは、人知をもっては知り得ないという。

これらの見解は、神について啓示されたままを、文字通りでもなく比喩的にでもなく、「いかにと問うことなく」(bi-lā kaifa)信じなければならぬとした伝統回帰の立場であるが、バグダーディー(d.1037/8)やジュワイニー(d.1085/6)などの後世のアシュアリー学派ではむしろ比喩的な解釈が大勢を占めるようになる。そういう意味では、アシュアリー自身の見解は、彼の後継者よりも「中道的」であったということができるかもしれない。

4 . 行為の獲得

中道的と評されるアシュアリーの思想のなかでも、もっとも特徴的なものが人間の行為に関する「獲得説」、いわゆるカスプ論⁽¹⁷⁾である。ムウタズィラ学派では、人間の行為は人間自らが自由意志によって選択することができるとして、人間に自らの行為の責任を厳格に課す立場が標榜されたが、これに対抗してアシュアリーは、この世のすべては神の意志によってのみ生じるとする伝統主義的な神の全能性の主張を採用した。しかし同時に、頑迷な宿命論的思想を排除し人間の無責任な態度を匡正するために、神による行為の創造と人間による行為の獲得という独特の理論を打ち立てた。

神義論は神の唯一性とともにもウタズィラ学派が強く主張する原則であるが、アシュアリーにあっても、神の正義は守られなければならない教義である。この世に存在する事象は、善も悪もすべてが神の意志によるとする立場にあっても、人間が自らの行為に対して責任を問われないということとはあり得ない。そこでアシュアリーは、行為は神が創造し人間がそれを獲得する (kasaba) という獲得説を主張したのである。

諸行為には、それらが実際にあるように創る行為主がなくてはならない。なぜならば、行為には行為主が不可欠であるからである。そこで、その実際の行為の行為主が物体でないとするれば、至高なる神が実際にその行為の行為主でなければならない。⁽¹⁸⁾

[人が]「不信仰を獲得する」という意味は、彼が生成された能力 (qūwah) にしたがって不信仰者となるのであり、「信仰を獲得する (iktasaba)」という意味は、彼が生成された能力にしたがって信仰するのであり、実際にある物事を獲得することではない。実際にある行為を創るのは万有の主である。⁽¹⁹⁾

ここでアシュアリーは「獲得」という言葉を用いながら、言語上の意味とは異なる点を強調している。ある行為にはその行為を創る、あるいは獲得する「主語」がなくてはならないが、人間の行為に関するかぎり、実際に創るのは神であり、人間は創られた行為によって行為者となる。この獲得説についてジマレは、「行為とは、神がその創造において神の全能性を示すものであり、人間がその獲得において人間の能力を示すものである。人間が能力を持つものとして、その能力にしたがって決定されるのが獲得された行為である⁽²⁰⁾」と解説する。彼によれば、アシュアリーは「行為」そのものよりも「能力」を重要視しており、行為を「二つの能力者に共通のひとつの能力の対象」とするとする。ジマレは、同時代のアシュアリー学派の学者が人間の行為はある面で獲得であり、ある面

で創造であるとして「二つの行為主にひとつの行為」と考えるのに対して、アシュアリーの立場は、神をのみ真の「行為主」とするという点で徹底していると評価する。これは、人間に「能力者」という形容は付与するものの、決して「行為主」という可能性を与えず、神の創造者としての立場をより明確にしたというものである。

一方、ギャルデはアシュアリーにおける人間の行為について、(1) 行為に先行する一時的な生成された意志、(2) 一時的な与えられた能力、(3) 遂行される与えられた行為、(4) 能力と行為とのあいだにある関係、という4要因をまとめている⁽²¹⁾。行為が遂行されるためには、まず人間に神によって生成された意志が存在しなければならず、ついで一時的な能力が与えられ、この能力と行為とは獲得によって結び付けられて、はじめて行為の遂行が可能となる。この過程は一瞬のうちに実施され、人間にはあたかも自分の意志と能力によって行動が起きたように感じられる。こうしてギャルデはアシュアリーにおいては、意志も行為も能力も、行為の遂行にかかわるすべての要素が神からもたらされていることを明らかにしている。この図式によれば、ジマレが言うような、人間が行為の「獲得」によって、自らの能力を示すということは、不明瞭になるであろう。

これについては、シャフラスターニーの『諸宗教諸分派集』(Milal wa-l-niḥal))に次のような解説がみられる。

獲得される行為 (muktasab) は (人間のなかに) 生じた能力 (qudrah ḥāṣilah) によって能力の対象となるが、それは生成された能力 (qudrah ḥādithah) のもとで生起する。・・・生成された能力には〔事物の〕生成 (iḥdāth) に影響を与えるものはない。なぜなら生成の法則は原子や偶有との関係で変化することのない〔神の〕摂理 (qaḍīyah) であるからである。・・・人間がある行為を意志し、それに打ち込めば (tajarrada la-h) 神は生成された能力に続いて、あるいはその下に、あるいはそれと同時に、生起する行為を実現させることによって、神の慣行 (sunnah) を遂行するのである。この行為がカスブと呼ばれる。それは、神の側からは作成 (ibdā‘) あるいは生成 (iḥdāth) としての創造 (khalq) となり、人間にとってはカスブとなり、自己の能力のもとに生じるもの (ḥāṣil) となる。⁽²²⁾

この引用によると、アシュアリーにおいては、人間に行為をなすための直接的な能力を想定することは避けられており、人間に備えられた現実の能力も、その結果である行為も、ともに神によって創造されたものであると考えられていることが明らかである。つまり、

ここに「二つの行為主」を立てることになる。第二の行為主である人間は、第一の行為主である神に対していかなる効力も持ち得ない。神のみが効力を持つということは、人間が行為を創り出す能力を持つことを不可能にする⁽²³⁾。行為の実現に際して人間は能力を持つように見えるが、それは生成された能力であり、行為を獲得することはこの生成された能力によってはじめて可能となる。このような「能力」と「行為」との間にある関係とは、獲得、つまりカスプのことである。

人間の能力と行為における関係としてカスプをたてることは、神と人間との二つの行為主を想定する立場であると同時に、二つの能力を想定することでもある。上記のシャフラスターニーによれば、「獲得される行為」は、神が人間に与えた「生成された能力」のもとで人間に「生じた能力」によって実現されることになる。第一の行為主である神の側からは「生成された能力」が人間に与えられ、人間はそれに続いて、あるいはそれと同時に、彼のなかに「生じた能力」を手に入れ、それによって行為を獲得し、いわば第2の行為主となることができる。つまり人間が行為主となるということは、神から与えられた能力に基づいて、人間のなかに彼にふさわしい能力が生じることになり、その生じた能力にしたがって行為を獲得することになり、それによって彼が「選択した」行為が実現することになる。こうしてカスプにおける能力と行為はある意味での相関関係をもつことになる。

ジマレはこの相関関係を「その獲得において人間の能力を示すもの」という構図であるとして評価する。ジマレによれば、この相関関係において、人間は自らの行為に責任をもつ倫理主体となると考えられている。人間の行為を創り人間に能力を与えるのは神であるが、人間が自らのうちに生じる能力に応じて獲得する行為に対しては、終末論的な賞罰の対象となる。これによって、人間の行為についての神義論が成立することになるというものである。

しかし、カスプ論における能力と行為の相関関係は、実際には見せかけの関係であり、ジマレが評価するような能動的な意味ではないと思われる。アシュアリーのカスプ論は、神の全知全能性を擁護するために展開された理論であり、自由意志や終末論にかかわる人間の倫理的責任については、明確な解答を出すことができなかったからである。ジマレが評価する人間の能動的な役割は、アシュアリー以降のアシュアリー学派やマートゥリーデー学派などによって、形成されていった後世の理論であるということができよう。

5．獲得説の展開

後世のスナナ派思想についての論考には稿を改める予定であるので、アシュアリーの編み出した獲得説のその後の展開について、ここで簡単に触れておきたい。獲得説はアシュアリー学派の内部でもさまざまな議論の対象となったが、アシュアリー学派と対立したマートゥリーディー学派もこれを採用している。マートゥリーディー学派については本稿ではこれ以上は触れないが、この学派では、カスブを人間の能力に応じて創造される属性の一種であると考え、人間に備わった能力とのかかわりで行為が選択されるのであるから、カスブによる行為に対して倫理的判断が適応され得ると考えている⁽²⁴⁾。

ギャルデによると、ジュワイニー、ラーズィー(d. 1210)、ジュルジャーニー(d. 1413)といった後期のアシュアリー学派の学者たちは、カスブの成立要因として「優先因」(murajjih)を想定することによって、人間の行為に対する倫理的判断の可能性を確保しようとしている⁽²⁵⁾。人間はある行為について優先因が働くときに、その行為の遂行を意志し、神によって創られた能力にしたがってその行為を獲得する。優先因は人間がある行為を獲得するために必然的な要因として想定される。したがって、人間の行為の獲得という次元に優先因を採用することによって、人間が自らの自由な意志によって行為を選択するという見解は否定されても、神による宿命論も避けられることになると考えられる。

ガザーリーの『イスラーム神学要綱』(*Iqtisād fi al-i'tiqād*)のなかではカスブ論はあまり明瞭に論じられていないが、彼は、人間が行為をおこなう能力もその能力の対象である行為も、すべては「神によって創造されたもの」と規定している。したがって神のみが「創造者」あるいは「行為主」と呼ばれる。そのうえで、人間の意志的な行為については次元の異なった「カスブという名称」が要請されるとして、次のように語っている。

「神が行為を創造し、それとともに〔人間にそれをおこなう〕能力を創造するとき、神は能力と能力の対象とをともに創造する」⁽²⁶⁾

ガザーリーは「行為者の能力は、行為を引き起こす要因、あるいは原因として、能力の対象とかかわり(ta'alluq)をもつ」という論争者(ムウタズィラ学派と考えられる)の見解を反駁して、「能力の対象は能力によって生起するのではなく、至高なる神の全能によって生起するのである」⁽²⁷⁾と主張して、能力の存在の必然性とその対象との「かかわり」の必然性を否定する。

ここでみられるガザーリーの主張は「神はあらゆる事物、あらゆる出来事を創造する」という伝統的なアシュアリー学派の主張を繰り返したものであり、因果律の否定につなが

る偶因論的な議論であるが、フランクは、ガザーリーがこのような極めて伝統的なアシュアリー学派の議論を用いながらも、人間の行為と意志とのかかわりを明確にしていなと指摘する。さらにガザーリーが「行為の生起」が行為主の能力によっていることを取り上げながらも、ふたたび議論を不明瞭にしてしまい、自らの立場を明確にしていなと批判している⁽²⁸⁾。しかし、フランクが批判するように、ガザーリーの立場が明確にアシュアリーを受け継いでいないのかどうかについては、さらに検討を要する。

すでにみたようにジマレによると、アシュアリーのいう「獲得する行為」とは、人間の意志にかかわる行為である。それは神によって創られた行為であるとしても、人間がそれに責任をもち、最後の審判において判定される行為である。この意志的行為を論証するためにアシュアリーは、ムウタズィラ学派に対抗して、人間の行為はまず神によって造られたものであることを示し、ついで、その行為と人間との関係を明らかにした、というものである⁽²⁹⁾。ジマレはまた、カスブ論は神と人間とのかかわりを検討するうえで優れた考察であると評価し、「神のみがあらゆる行為を生成し、人間は神によって与えられた能力にしたがって、それを獲得するというアシュアリーの主張には、ある意味で人間も自己の行為の真の要因であるかもしれないという想定があり、人間に能動的な役割を付与した観念である」⁽³⁰⁾と評価している。

しかし、全体的にみて、アシュアリー自身は極めて伝統的な解釈を維持し続けたということが出来る。したがって、ジマレの評価とは反対に、アシュアリーのカスブ論が、人間の自由意志やそれに伴う責任論を過少評価する方向へと誘い、ある意味で倫理的楽観主義を導いていったことは否めない。この思想が哲学者としても高名であったガザーリーに受け継がれ、彼の高度な学的技術によって偶因論の主張と因果律の否定がさらに理論づけられ、それによって思想界に神の全能性を強調する立場がいつそう強まり、イスラームの多数派に宿命論的な傾向を定着させたことも、また事実であろう。しかし、このような傾向は、厳しい宗教法を生涯負う一般信徒にとっては、絶対的な神への信仰的な「恐れ」と「依存」による救済を求める方途を意味したのかもしれない。そのように考えると、ガザーリーが学者としては当時の最高位であったニザーミーヤ学院の教授職を捨て、10年間の放浪の旅に出て、自ら神秘主義の行者となったことも理解されるであろう⁽³¹⁾。当代最高の哲学や論理学の論述手法を用いて、「神の行為」を分析してみても、そこからは宗教的救済や精神的な平安はえられなかったに違いない。クルアーンに記述されているまを「いかにと問うことなく」信じるという素朴な信仰こそが、アシュアリーもガザーリーも究極的に

目指した境地であったのかもしれない。

だからこそ、アシュアリー神学が、さまざまな曲折を経ながらも、ガザーリーの理論づけによって正統的神学として定着していったのであろう。多数派から受け容れられる素朴な信仰を体系化したことにこそ、アシュアリーの評価は向けられるべきであって、ムウタズィラ学派と対抗して、人間の意志と能力に能動的な意味づけをおこなったと解釈することは、むしろ「宗教」としてのイスラームを理論づけたアシュアリーを正しく理解することには、ならないように思われる。

註

- (1) イスラーム思想史におけるこの二つの潮流の関係については、拙著『イスラームの倫理 アブドゥル・ジャッパール研究』(未来社、2001年)16-21頁、拙稿「イスラームの倫理」(『イスラームの思考回路』『講座イスラーム世界』第4巻、竹下政孝編、栄光教育文化研究所、平成7年)105-143頁、「アブドゥル・ジャッパールの倫理思想における『利益』(naf')の概念」(『オリエント』第32巻1号、日本オリエント学会、平成元年)33-49頁などを参照されたい。
- (2) この相反する立場は、世界の創造主という神の存在と、その神による被造物としての人間との究極的なかわりにおいては、宗教的にも倫理的にも調和が保たれている。しかし、ムハンマドの死後の後継者騒動のなかから浮上した「信仰と行為」の問題から、予定論と宿命論の思想的論争が激化し、「啓示と理性」にかかわる論争が果てしなく続いてきた。これに関しては上記の拙著『イスラームの倫理』、とくに43-112頁を参照されたい。
- (3) ムウタズィラ学派はイスラーム史上最初の大思想運動を起こした学派であり、人間に与えられた理性を知的判断の基準として採用し、合理主義的神学を構築した。アッバース朝初期の827-848年に、彼らの学説のなかで「創造されたクルアーン」説が公式学説として採用され、最盛期を迎えたが、その後は政治的権力と一線を画して辺境地域に退き、シーア派哲学思想と関連をもちながら、現代に至っている。この学派の理性主義思想が何から影響を受けて発生したのかについては、諸説があるものの明確なことはわからない。当時のカリフの施策としておこなわれたギリシア科学の翻訳作業によって広く紹介されたギリシア思想の影響が間接的にせよ、大きかったことは事実であるが、それがそのまま採用されたとは考えられない。またイスラーム支配下に入ったキリスト教徒やユダヤ教徒、周辺地域の諸宗教の伝統などからの影響も取り上げられることがあるが、それらも間接的なものに過ぎなかったと思われる。『イスラームの倫理』の22-25頁と序章の註8を参照。
- (4) 総本山制度のないイスラームでは、原則としてある見解や主張を正統か異端かと判定する機関は

存在しない。あえて言えば、それを判定するのは信徒の総意であるということができる。そういう意味では「正統派」という言い方も適切ではないが、スンナ派は現在のイスラーム信徒の90%以上を占める大多数派であるために、本稿では便宜上「正統的」という言葉を使った。

(5) Daniel Gimaret, *La doctrine d'al-Ash'arī*, Paris, 1990. *Théories de l'acte humain en théologie Musulmane*, Paris, 1980.

(6) ムウタズィラ学派バスラ派の学者で子のアブー・ハーシムとともに同派の中期を担った。アシュアリーはアブー・ハーシムと兄弟弟子でもあった。W.M.Watt, *Free Will and Predestination on Early Islam* (London, 1948), pp.83-87, 136-137. *Encyclopaedia of Islam CD-ROM Edition*, “DJUBBĀ’Ī”.

(7) シャーフィーイー (767-820) によって創始された法学派で公式4法学派のうち3番目に成立した。先行するハナフィー派の推論を重視する立場と、マーリク派の典拠重視の立場との対立を融和し、法学体系の確立を図ったといわれる。イスラーム法の基盤となる「4法源」(聖典クルアーン、預言者の言行であるスンナ、信徒の総意であるイジュマー、法学者の推論であるキヤース)を確定したと伝えられる。*Encyclopaedia of Islam CD-ROM Edition*, “SHĀFI’Ī”, “SHĀFI’ĪYYA”.

(8) アフマド・イブン・ハンバル (780-855) によって創始された法学派で4法学派では最後に成立した。クルアーンとスンナを最も重視する強固な保守派であり、現代ではとくにサウジアラビアで同派の流れを受け継いだ法学が施行されている。*Encyclopaedia of Islam CD-ROM Edition*, “AHMAD b. HANBAL”, “HANBALĪ”.

(9) al-Ash'arī, *Kitāb al-ibāna*, ed., Bashīr ‘Uyūn, Damas, 1981.

(10) al-Ash'arī, *al-Kitāb al-luma’*. *The theology of al-Ash'arī*, (Richard McCarthy, Beirut, 1953.) に収録されているが、これにはアシュアリー著とされる *Risālah fī istiḥṣān al-khawḍ fī ‘ilm al-kalām* も収録されている。以後 Luma’ と略記する。

(11) al-Ash'arī, *Maqālāt al-Ialāmīyīn*, 2nd Edition, ed., Hellmut Ritter, Wiesbaden, 1963.

(12) マートゥリーディー (827-944) によって創始されたとみられる神学派であるが、ハナフィー派の法学と協調して展開されており、ハナフィー・マートゥリーディー学派とも呼ばれる。マートゥリーディー自身はムウタズィラ学派に近い立場をとり、理性主義的な思想を展開していたが、後世の学派は保守的な傾向をもつようになり、アシュアリー学派とならんでスンナ派の神学思想を形成した。*Encyclopaedia of Islam CD-ROM Edition*, “MĀTURĪDĪ”, “MĀTURĪDĪYYA”

(13) 神の属性をめぐる論争に関しては『イスラームの倫理』43-62 頁、とくにアシュアリー学派との論争に関しては45-49 頁を参照のこと。

(14) 「慈悲深きお方は玉座に鎮座なさっている」(クルアーン20/5)ほかにクルアーン2/2

9, 3 / 26, 9 / 129などを参照されたい。

(15) ムウタズィラ学派の第一の主張である「神の唯一性」から導き出された主張であるが、「神の言葉」としての神聖性まで否定したものではない。しかし、クルアーンの神聖性を強調する立場からは激しい攻撃を受けた。拙稿「クルアーン創造説における『神の言葉』(Kalām Allāh)」(『イスラム世界』48, 日本イスラム協会、1997年)20-21頁。

(16) 「おお人間よ、本当にあなたは、主の御許へと労苦して努力する者。神に会うことになるであろう。」(クルアーン84 / 6)ほかに75 / 22 - 23も。

(17) 「獲得する」という語は kasaba あるいは iktasaba のかたちで用いられるが、意味するところは同じである。「カスブ」はクルアーンのなかでも用いられている用語であるが、そこでは商業上の「稼ぎ」や最後の審判で判定される行為の成果を表す言葉として用いられており、アシュアリーーの用語とは次元を異にする。

(18) Luma' §88.

(19) Luma' §90.

(20) Gimaret, 1990, p.388.

(21) Luis Gardet, *Dieu et la destinée de l'homme*, Paris, 1967. p.63.

(22) Shahrastānī, *Milal wa-l-nihal*, vol. 1, Cairo, 1976. p.97.

(23) Jurjānī, *Sharh al-mawāqif*, vol.5, Cairo, 1976. p.106 ここにはムウタズィラ学派のジュッバーイーに対する反論として以下のように記されている。

「能力の対象に対する影響力の範囲と、(神と人間との能力に関する)等位性を取り上げてみても、それは、神が人間に比して最も能力があるという以外には不可能な議論である。神が(行為の創造に)影響力をもつということは、人間が(行為)に影響力を持つということを不可能にする。」

(24) Māturīdī, *Kitāb al-tawhīd*, Beirut, 1986. pp.225-6. マートウリーディーはアシュアリーーについて、人間に行為を創造する能力は否定したが、獲得を提示することによって中道を行ったと評価しており、人間が獲得する行為が神の規範に当てはまることによって宗教的な報酬の対象となるとしている。

「(人間の)行為には命令、禁止、約束、威嚇といった名称がついている。…人間が獲得し(kasabū-hā)遂行する(fa'alū-hā)諸行為に応じて行為を創造することによって、その行為の名称のとおり創造し、存在しなかったものを存在させるということは、神によってのみなされることである。」(p.226)

(25) Gardet, 1967, p.57.

(26) al-Ghazālī, *al-Iqtisād fī al-i'tiqād*, ed., Muḥammad Abū al-Qilā, Cairo, 1972, p.84.

- (27) al-Ghazālī, *ibid.*, p.87.
- (28) Richard Frank, *Al-Ghazālī and the Ash‘arite School*, Durham, London, 1994, p.42-47.
- (29) Gimaret, 1990, p.371. ジマレはこの著書の序章でも、クルアーンとスンナに従うなら、スンナ派の思想以外には出てくる余地はない、と断言しており、スンナ派思想では真の意味で人間の理性が認識されていると評価しているが、この見解は終章でも繰り返されている。
- (30) Gimaret, 1980, p.84.
- (31) 神秘家としてのガザーリーについては『ガザーリーの祈禱論』の序章(1-25頁)、第1章(27-74頁)(中村廣治郎、大明堂、昭和57年)を参照されたい。

キーワード：イスラーム神学、アシュアリー、ムウタズィラ学派、宗教倫理、獲得説

Keywords: Islamic Theology, al-Ash‘arī, al-Mu‘tazilah, Religious Ethics, theory of acquisition